12月25日発行の「つながろうCO・OPアクション情報」37号
（http://shinsai.jccu.coop/）に掲載のメッセージ全文です。

メッセージ

被災地からのメッセージ

全国の皆さまへ

パルシステム福島
理事 佐藤君枝（さとうきみえ）さん・理事 矢吹弥生（やぶきやよい）さん

パルシステム福島は、被災された方の力となるため、さまざまな活動を続けています。活動のひとつ、手芸部「ふくちゃん」の様子を取材させていただき、主催者である佐藤枝理事と矢吹弥生理事に、お話を伺いました。

13年10月28日の「ふくちゃん」に参加した皆さん。左端が矢吹理事、右端が佐藤理事。

●月に1回の交流の場として

「あれ、間違えちゃったかな？」「そこまで縫わなくていいんじゃないの？」「そういえば、○○さんはどうしているの？」

手も口も動かしながら、参加者の皆さんは熱心に小さな布を縫っています。時折、笑い声も聞こえてきます。

2013年10月28日に行なわれた、パルシステム福島の佐藤君枝理事が主宰する手芸部「ふくちゃん」の活動の様子です。いわき駅（福島県）近くの大手スーパーの店内にある被災者交流スペース「ぷらっと」を借りて月に1回行なわれている活動で、取材に伺った日は10回目の開催。参加者全員で、「かわいいがま口」（小銭入れ）を作りました。佐藤理事と同生協の矢吹弥生理事は、参加者の進捗状況を確認しながら、手際よく製作をサポートし、全員が時間内に「かわいいがま口」を仕上げました。

製作終了後には、「ラジオ体操第一」をみんなで行ない、通りすがりの方も参加され、体を動かされていました。

●自分たちでできる復興のアイデア

手芸部活動の第1回目は、12年8月27日。発足のきっかけは、佐藤理事がパルシステム共済連主催の「パル家計応援パートナー」を受講されたことでした。

佐藤理事は震災で自宅が被災し、避難所で暮らしながら、津波の被害を受けた家の中の掃除と片付けに通う毎日でした。

「とにかくいわき市内がめちゃめちゃだったのです。原発事故の影響で物資もまったく入って来ず、まるでゴーストタウンのようでした。何かやらなくてはならないと思っていたそんなときに、講座の案内がきました。そこで、家計はもちろんですが、『地域をどうするのか』を考えるいい機会だと思い、発災から3カ月という時期でしたが、受講させていただくことにしました。従来のLPA（ライフプラン・アドバイザー※）の

ラジオ体操する「ふくちゃん」に参加した皆さん。

12月25日発行の「つながろうCO・OPアクション情報」37号
（http://shinsai.jccu.coop/）に掲載のメッセージ全文です。

手芸部「ふくちゃん」の活動の様子。

講習は家計や保険などお金のことが中心ですが、11年は『お金』『健康』『生きがい』の3つの視点から、『住み慣れた地域で自分らしく健康にいきいき暮らす』という内容で、とても身近でありがたいテーマでした」と、当時を振り返ります。

受講を続けながら「自分たちでできる復興」を考え続け、手芸品を作って販売することを計画しました。「年明けの12年2月から、手芸が得意な仮設住宅の友人たちに『仮設に引きこもっていないで、手芸品を作って売ろう』と声を掛けました。得意なことを生かして前向きになるきっかけをつくりたいと思ったからです。何人もの友人が協力してくれて、さらにNGOのシャプラニールの方が集まる場所を提供してくださいました。当初は、パルシステムセカンドリーグなどの方々のご好意で築地本願寺のイベントで販売をさせていただきました。イベントは和気あいあいと楽しかったのですが、出品者はほとんど素人なので、作品の出来上がりにも差ができてしまうため、現在は、手芸品を売ることが目的ではなく、お話をしたり、友達になったりと、仮設から出てくるきっかけの場として『ふくちゃん』の場を活用していただいています。ここでお友達になる方も多いんです。最初は黙々と針を動かしているだけだった人も、何度かおいでになるうちに仲良くおしゃべりされていますね。どちらからいらしているのかお話になりたくない方もいらっしゃるのでこちらからはお尋ねしていませんが、おしゃべりしながら手芸を楽しんでいただき、そのあとラジオ体操で縮んでいた背中を伸ばして、スッキリした気持ちになっていただければと思っています。介護予防？にもなるかも、ですね（笑）」

●今後もさまざまな活動を企画

既に発災から2年半が過ぎました。福島では、依然として県内や県外へ避難している住民が約9万人を数えます。

佐藤理事と共に「ふくちゃん」を運営する矢吹理事は、「高齢化が進んでいるなか、介護などの地域支援もさらに求められます。生協として何ができるのか、自分は何ができるのか、考えていかなくてはなりません。『ふくちゃん』の活動もその一つです」

「みちのく福幸なべ～仙台味噌仕立て～」

佐藤理事も、「まだまだ先は見えませんが、全国の生協の皆さんに支えられ、パルシステム福島もさまざまな活動を続けております。『ふくちゃん』は、被災者交流スペースの運営が終了してしまうので、新たに場所を考えなくてはなりませんが、活動は続けていきたいです。」と話されました。

パルシステムでは、被災地支援のために取り組みを継続しており、13年冬にはパルシステム連合会の宅配の企画で、パルシステム福島商品開発チームが開発協力した、岩手県産のイカ軟骨、宮城県産の牡蠣、福島県で加工したマグロハラミなどを使用した「みちのく福幸なべ～仙台味噌仕立て～」の供給が決定しました。

佐藤理事は、「『福幸なべ』の開発はどうしても実現したかった企画です。やはり、経済の復興が、震災からの復興の一番の近道だと思います。被災地域の県産品を具

「みちのく福幸なべ」について、熱く語る佐藤理事（右）と矢吹理事（左）。

材として使用することで、少しでも復興の役に立てれば、という思いで開発協力しました。仙台味噌味でとってもおいしいので、ぜひ召し上がっていただきたいと思います。よろしくお願いいたします」と開発の思いを話します。

「11年12月に行なわれた商品展示会には、みぞれが降る中、遠くは九州からのメーカーさまをはじめとした各メーカーさま、パルシステム連合会の職員の皆さんなどが駆け付けてくださり、ブースの出展をお手伝いしていただきました。その思いに、とても感動しました。このような皆さまの応援を力として、今後も福島の復興に向けてできることを着実に行なってまいりたいと思います。これからは避難されて来た方が集まりやすいよう、年代ごとのイベント企画などを開催できたらと思っています」と、佐藤理事。

いわき市には、県内各地から避難して来られた方が大勢いらっしゃるので、今後も異なる地域の方と出会い、会話ができる場づくりを進めていきたいとお話されていました。

（取材日 2013年10月28日）

※ くらしのお金全般についての学習会を行なう専門知識を持ち、組合員向けの保障の見直し学習会などを企画や運営、講義を行なう組合員アドバイザー。